

傾いた鼎 かなえ

馬場 駿

圭の章

優布に出会ったのは、Aデパートの催物フロアで開催されていた「古都・今昔物語展」。俺は写真家入江泰吉が撮った記念すべき薬師寺東塔に見入っていた。左の方から来る、とてつもなくいい香りに誘われて目を横にやると、右の耳の脇にポニーテイルのように髪を束ねた、ほとんどすっぴんの女子学生風の女が、口元に笑をたたえて俺を見ていた。

「西塔の心礎（しんそ）に映る、ってあるでしょ、タイトルに」

俺は自分の顔を指差して、質問されたのか、と目で女に聞いた。『かっこいいじゃん』と少しときめきながら。

女は「ええ、あなた」と、笑顔を増幅させた。

「心礎ってなあに？」

「塔の心柱（しんばしら）の礎石、石製の基礎だよね」 反射的に答えていた、俺……。

「ふーん、そうなんだ」

ふーんで、小鼻が可愛く少しだけ膨れた。

「中心に柱を受ける穴があつてね、そこに水が溜まつてる、その水面に東塔がくつきり映つてるってわけ」

「見てみたいな、実際に」

「無理だよ、昭和五十六年に西塔が再建されちゃって、この写真の中でしか楽しめない風景なんだ」

「詳しいのね、ファン？ この人の」

「まあね、心の中では弟子入りしてるってどこ？」

自分でも初めて口にする『想いの中の想い』だ。語尾が自然に上がった。

「ヌードなんか撮らないの、若い女性の」

女が、俺の肩から下がっている一眼レフを指差した。「い、いや、土塀だとか薨（いらか）だとか、苔生した自然石の階段がせいぜい。別に撮りたくないわけじゃないけど、モデル代高いし……俺、こう見えてもまだ学生だから」

さすがに、しよつちゆう腹を空かしているバイト学生だとまでは言えなかった。

「なつてあげましょうか、わたしでよければ」

俺はプイと横を向いた。馬鹿にされたとしか思えなかったのだ。

あとで優布から聞いたのだが、会場でカメラを下げた六人の若者にモデルになりましよつかと言つたところ、俺を除いた全員が二つ返事でのつてきたらしい。不純な動機が見え見えだったという。変わった女だと思つたが、男根を揺さぶるような性的魅力があつて、彼女の『試験』に合格したことは素直に喜んだものだ。優布という名は『優しい布』ではなく『優れた布』なのだそうで、名付親は彼女の祖父、中規模の繊維会社の社長だという。仮名表記も当初『ゆふ』が予定されていたのを彼女自身の反対で『ゆう』に急遽変更したのだとか。

「わたしが、オギヤーと産声をあげる前にね、ウー、ウーって何回かうなったらしいの。パパがママからそれを聞いて、やっぱりフは古いウにしようって」

半分創った話だとは思ったが大いに笑った。優布が周囲の愛情をふんだんに受けて生まれ育ったことを象徴するようなエピソードではある。

優布は、在籍する美術大学があるT駅から五キロほど離れた小高い丘の上のマンションに一人で住んでいた。初めてついでに行つたときは、そのリッチさに度胆を抜かれ、別世界の女だと違和感を抱いたものだが、彼女には人を金銭で量るといった言動が一つもないと気づいてからは、生活程度の差に頓着はなくなった。

驚いたことに優布は、こと美術のことになると、一般的な羞恥心というものが全く無かった。言つてみればモードが切り替わるのだ。カメラの前に初めて立つたときも、全裸になるのに何の躊躇もなかった。ただ、被写体として気になるからと言って、裸でバスルームの中に消えると二十分も出てこなかったことがある。そのときの理由は、体を締め付けていた下着の跡がなかなか取れず、やむなく入浴してしまつたということだった。なるほどと感心し、むしろカメラマンが気づくべきだったと謝つたりもした。求めたポーズに「ノー」は一切無かった。物憂い感じ、明るい感じ、オーガズムの後のような感じ、表情にどんな注文を出してもきちんと応えた。その代わり作品の出来には口うるさく、「きれいに」撮れていないと彼女が判断した写真は、目の前で無残に破られ、ネガも捨てられた。「無償のモデルの権利」なのだから。しかし優布の審美眼には狂いはなかった。俺が自身で評価した写真で、彼女が駄目出しをしたものは皆無だった。一度こんなことがあった。彼女の陰阜から臍、乳房と辿る美しい曲線をライティングの限りを尽くしてアートの撮つたことがある。普通、陰毛も露なこの種の作品は、首から先をフレーミング時に外すか、トリミングしてモデルの特定を避けようとする。

それが撮影条件だったり、モデルに対する礼儀だったりする。ところが優布は違った。「わたしである必要ないじゃん。今度からトルソにライティングして撮ったら」と怒り、顔を付けるよう抗議したのだ。いうまでもなくトルソはイタリア語で人の胴のこと、首も手足もない彫像をさしている。優布が優布であるためにはたしかに首が要る、パーツを撮ったのではないのだから。問題のこの作品はカラーで全紙サイズにし、パネリングしていまも俺の部屋に飾られている。

反対に俺が全裸にされることもあった。「男の肉体を気が済むまでデッサンしたい」というのである。もちろん美大の授業で何回かは描いているらしいが、「男性たる象徴のペニスを描き写せないようなら無意味」だというのだ。同じアートの世界を覗く者として首肯(うなず)くしかなかった。優布はエロチックに装って素描を続け、俺は遠慮なくエレクトロニックさせて彼女の視線に我が身を晒したものだ。「クリムトも描いてるけどあれ、性器が萎えちゃっててパワーがないの」と優布。後でそのクリムトのローアングルからの習作を見せてもらったが、なるほど情けなかった。「ミケランジェロのダビテ像も嫌い。なぜ勃起させて創らないのかしら」優布によると、その点、日本各地に散在する奇祭の御神体には、男根崇拜の内に美の極致があるという。

二人の肉体の置き場所からいえば、マンションで会うたびにセックスしていそうだが、不思議にそれは無かった。アルコールの力を借りてお互いにオナニーを見せあつたこともある二人なのに。おそらく誰も信じないに違いない。性交がないというだけで、いや、性交がないからなおさらに、二人の関係は、極めて緊密で、淫靡で、危険なものだった。そういう得難い男女の絆を、たかが性器結合一つでありふれたものに墮したくなかった。溜まった精液を出したければ、学生食堂や図書館に相手はいくらでもいた。セックスをテニスや水泳と同視し、楽しくスポーツしたがっている女が氾濫しているからだ。俺の中で優布は、そういう女とは一線を画すべき存在だった。

……そのはずだった。

或る日ゼミの帰りに優布の部屋に立ち寄ると、そこに、青白い顔の、背の高い瘦身の青年がけだるそうに横になっていた。俺を見ると、長い手足を畳むようにして座りなおし、「シヨウです」と、これ以上短くはできないという挨拶をした。優布が「柴田翔の翔よ」とすかさず補足をしている。俺は、聖地を異教徒に汚されたような不快感に体中が充たされて「おう」と言っただけり名乗りもしなかった。優布が俯（うつむ）いて笑いを堪（こら）えているのが分かった。「案外ちっぽけね、圭って」そういう意味の、侮蔑（ぶべつ）だろうと思った。「あら、妬（ねた）いてるってことは、わたしのこと好きなんだ」という揶揄（やゆ）（やゆ）かもしれないのだが。

「彼ね、難病の患者さんなの」

優布はこともなげに言っただけだ。俺の中に奇妙なものが蠢（うごめ）いた。拒絶反応は少しも起こらず、即座に浮かんだのは『じゃあ、優布との男女関係は無いわけだ』という想いだっただけだ。

翔も屈折することなく、「伝染はしませんから」と微笑しながら首筋を指先で搔（か）いてみせた。「じゃ、もしかしたら童貞？」

翔の軽さに、つい調子に乗った。

「圭！」とすかさず優布が恐い目をした。

「ええ、正解です」と本人はまた、さっきの微笑だ。

大学の構内で「死なない蟻の群れ」という詩集を配っていたところを優布に「見初められた」らしい。何度か会って話していくうちに俺は、翔の能力や感性の鋭さに魅（ひ）かれるようになるのだが、最初のうちは理性では説明できない気味の悪さがつきまとったものだ。

優布と俺のエロスの部屋は、三人が集うことによってスコラ（学校）に変貌した。たとえばこんな会話になる。

口火はだいたい優布が切る。

「ヨーロッパの肖像画群を見るとね、なんだか後世の写真発明の動機になってるのかなって思うところがある」

「確かに写真なら絵は写真にかなわないですよね」

そうそう、翔は最後まで、敬語的な語り口を崩さなかった。

「ところがさ、明治の後半にアマチュアカメラマンが発生してきた当初はね、絵のような写真を撮ることが目標だったんだ」

「限りなく写実的な絵って写真未満でしょう、結局。だったら写真が絵を模範にするのって変じゃないかな」

「構図かな？ 絵画の歴史は古くって、その技法は確立してるわけだし、プロの写真家だって参考にせざるをえないわ、ましてやアマじゃね」と優布の指摘は鋭い。

俺が目標にしている入江泰吉の風景写真も、遠近法と投影図法を駆使しているように思う。

「圭、写真が日本に来たの、明治じゃないよね」

「坂本竜馬なんか被写体になってるくらいですから」と、先ず翔が受けた。

「安政年間にフランスのロシエが湿板写真を伝えている」

「湿板、乾板の、あの湿板ですか」

「そう、化学の実験みたいに大変で、当時の写真家って撮ること自体に相当のノウハウが必要だったらしい。簡単に言っちゃうと、ガラス板の上にヨードコロジオン剤という液を塗って、硝酸銀溶液に

つけて、濡れている間に勝負しなくちゃいけない」

「ふうん、それで湿板で言うんだ」

「すみません、そのヨードコロジオンて？」

翔はこういうところには容赦がない。答えられないのを予想してなら恥をかかすことが目的で、イヤな性格この上もないが……。

「沃化カリウムや臭化アンモニウムをアルコールに溶かしてコロジオン溶液と混合したものだけど、君、聞いてて分かるの？」

「あ、いえ。ごめんなさい」

「圭、彼はそういうタイプじゃないわよ」

優布は、俺が質問の動機を曲解して翔を責めたと捉えていた。当たっている。ちっぽけなのは俺だ。第一俺自身、たまたま調べたばかりの知識で、極めて薄っぺらだ。

「そ、それでさ、露光したら硫酸第一鉄溶液で現像。水洗してから定着だけど、これがなんとシアン化カリウム液なんだ」

必死に気持を立て直した。

「うそ、それって青酸カリじゃないですか」

「命懸けね、湿板写真て」と優布が笑った。

「そういえばけっこう長い間、写真を撮ってもらうと命が縮むとかなんとか、ねえ優布さん」
乾きかけた空気の中での盛り上げる努力か。

「写真撮る方がよっぽど縮みそう。圭、よかったね、デジタル時代の写真家志望で」
話題の最後に俺の名前が呼ばれた。何ということもないのに、妙に嬉しかったのを覚えている。

優布ぬきで翔と会う機会も増えていった。といつても週二回が限度で、彼自身安静日をつくつていく様子だった。生来体が弱いのだろう。文学部を志望したのも「生と死」ということを考えたからだったという。家を訪ねたときの衝撃は忘れない。郊外にある二階建の建物はタイル張りの相当豪華なもので、母親の玄関先での応対も丁寧だったが、「翔なら裏にプレハブがありまして、そちらに」と言う。生け垣の内の径（こみち）を辿っていくと十畳ほどの粗末な平家が建っていた。オレンジ色のドアを叩くと翔が、生気のない顔を出して「あ、ほんとに来たんだ」というような小さな驚きの色を見せた。少し大きめのベッドが一つあるだけで、その周りを本が取り巻いている。そのほとんどが古今東西の文学に関するものだったが、座る場所を確保するために本の山を掻き分けているうちに、ハードコアに属するエロ本を見つけてハツとした。何に使うかは言わずもがなだ。気づかないふりをしてボードレールの詩集をその上に被せた。優布がいたなら、同じ配慮をするだろうと思った。

「二次元の女を相手に自分で始末するって結構哀しいものがあるんです」と突然翔が言った。

「配慮」に気づいてしまったらしい。俺はどう返していいのかわからずに、翔の顔をまっすぐに見た。彫りが深いというよりは、頭蓋骨の形がそのまま分かるような痩せ方をしている。

「でも、知ってしまったえば女も夢見たそれとは大違いって、大勢の作家が嘆いていますよね」

「不味そうだって食べないか、食べてから不味いつて納得するかの違いかな。なんか無いの、ボードレールに、女の悪口」と、翔の得意分野に振ってみた。

翔は天井を仰いで、あれこれ思い出す表情をしたあとで、声音まで変えて暗誦を始めた。

「女、傲慢にして愚鈍な、いやしい奴隷、笑いもせずおのれを崇（あが）め、悪なしにおのれを愛する」

※①

「すげえや」と俺は手を叩いた。

「優布さんは違いますけどね」

翔が、しんみりと言って目をパチパチとさせた。

「ああ、優布は違う」と口で言ったあとで、『好きなんだ？ 優布のこと』と心で質(ただ)した。俺と二人きりのときは言動があれほどラディカルな優布が、翔が加わったとたん控え目でごく常識的な女に変わる。女らしくする理由が、翔の病気への気遣いだけであることを祈らずにはいられない。患っている難病が何なのかは知らないし、聞く気もない。自分の体だけを見詰めていればよかった。過去と、自分の心を凝視している現在と、翔がその間を行き来している苦しさを垣間見る思いがした。内なる激情に動かされ、命と引き換えてでも抱きたい、抱かれない、そう思わせる何か。情熱をいや増させ、それを自ら諦めさせる必要エネルギー量を幾何級数的に増大させるだけだ。そう思う。「翔、めしはここで？」

なぜか食事のことを口にした。

翔は「え？」という顔をしたあとで、ドアの入り口の小さな卓袱台(ちゃぶだい)を指差した。家の人がお盆に食物を乗せ、ビクビクしながらこのプレハブに運んでくる姿が目につかんだ。『可哀相すぎる』俺はうっかり涙を浮かべた。肉親じゃないかと。

「少しは抵抗しろよ、怒鳴れよ！ お前は罪人かよ！」

翔が、不思議なものでも見るような目で、ゆっくりと首を傾げた。

翔には残酷かもしれないが、優布と俺の関係の深さを知らせるべきだと思った。それは翔に嫉妬し

たということだ。翔をライバル視すべき男として認めたことだ。俺は或る種の惨めさの中で、彼を下宿先に請(しよう)じ入れた。

思った通り翔は、優布のヌードパネルの前に立ち、数分間身動(みじろ)ぎもしなかった。

一枚の写真は百万言を費やした自慢話に優るはずだ。色恋の無い間柄でこれだけの痴態をさらす女はいない。いや、実際は山ほどいるのだが、経験の無い翔はそう思い込むに違いない。胸がチクリと痛んだ。

「僕が圭さんだったら、優布さんをこんな風には撮らないと思います」

俺はこの言葉を、嫉妬から出た辛口の批評、としか受け取れなかった。

「アートじゃないって言うのか、きれいに撮れてるだろ、優布が、この上もないほど。否定しないでくれよな、優布と俺の、最高傑作なんだぜ、翔！」

優布と俺の、というところを口調を変えてまで強調した。

「アートです。きれいです。でも、そういうことじゃないんです」

「おい翔、お前嫉妬……」と言葉をつないで翔の襟をつかんだ。その瞬間、絶句した。翔の目から大粒の涙がこぼれ落ちたのだ。

翔は、それ以上何も言わず、そのまま部屋を出ていった。そして、俺の部屋には二度と来なかった。

優布、翔、俺の三人の「逢瀬」は、それから半年ほど続いた。表面上は、何のわだかまりもない、類例を見ない仲良しとして。

その間での或る日、優布のマンションの近くにある小さな児童公園に立ち寄ったことがある。優布の服装はムウムウに似た大きな花柄の部屋着、髪をショートカットにしたことも手伝って、休日の女子中学生といった風情だった。その彼女が、決して綺麗とはいえない野良犬の子と遊びだした。する

と、とたんに子犬は枠の中の絵となり、動くヌイグルミと化した。

「圭さん、カメラいいですか」と翔が手を出した。「撮りたいんです」と言う。カメラ愛好家なら誰でもそうだと思うが、愛機は人には貸さない。しかし俺の中にはこだわりがあった。あの日の「僕が圭さんなら」云々の批判である。「見せてもらおうか、カメラの腕」と愛機を首から外して翔に手渡した。『どうせピンボケさ』と。

「モータードライブなんかないからな、それ。ショットショットを大事にな」

事実行きつけのフォトアート店から戻ってきたベタ焼きを見た限りでは、十一コマ中、キャビネ以上に引き伸ばせる出来のものは一枚もなかった。しかしその中の一コマの「絵」に俺は「あつ」と声を上げた。引き伸ばしは大学の部室を借りて自分でやった。優しく細めた両の目、あくまでも皓（しろ）く健康的な歯、そよかぜを感じさせる前髪、キョトンとした子犬の表情も手伝って、優布の香りや息遣いまで伝わってきたきそうな作品だった。翔は腕ではなく心で撮った。そう思った。気が付くと、写真は粉々にされて俺の足元に散らばっていた。

『おい、誰だ、こんなひどいことしたのは！』

翔が体調を崩し、約束した日が優布と二人だけになったときがある。優布の部屋がいつもと違う色に見えた。目的があるからだ。もう男の裸を描きたいという時期は過ぎたらしく、ほとんど下着姿に近い俺の方には見向きもせず、壺様の花器の中で威張るヒマワリをデッサンしている。油絵に入るときに着る、いつものブカブカなお手製のスモック姿の優布の後ろに立った。

「きょうはゴッホかい？ 優布」と言いながら覗くと胸の谷間が無防備な形でそっくり見えた。

『優布とやっておきたい』

いや、むしろ自分が挑まないで誰が挑めるというのか、という強烈な自負が俺にはあった。求めて拒絶されるなどという展開は百パーセントありえないのだ。

「優布……」耳元で囁き、優布の右手からコンテを取り上げた。左手はもう彼女の乳房を揉んでいる。優布はゆっくりと体を振(ねじ)って、『どうしたの』というような顔をした。怒ってはいない。俺は行動で『欲しい』と台詞をはいた。裾をまくってじかに陰部に触れたのだ。優布は為すがままになってその先を促した。少なくとも俺にはそう思えた。大きなスモックの中身が下着なしの優布だったこともその思いを補強した。優布を抱いてベッドに移し、俺は夢中になって優布の体に自分名義の刻印を押し、心の歴史を肌の『シミ』に転化しようと試みた。『誰にもやるものか』と。撫で、さすり、揉み、舐め、吸う。その全てが、翔の存在によつて澱んでしまった命の水を浄化する儀式だった。インサートの前にも、膣内射精の前にも、優布の「ノー」は無かった。誰にでも許すことではない。俺はそのことを男としての最高のオルガスムスと評価した。

「圭、気がすんだ？」

優布がスラリとした裸身のままベッドを下りた。

目が心なしか寂しそうに見える。

「それはないだろ」

「シャワーしてくるね」

優布はそれだけを言つてバスルームに消えた。それなりに反応はしていたものの特別燃焼していた様子はなかった。逆に怒ったり蔑んだりしている様子もない。拍子抜けをした。それが本音だった。それはないだろ、と、このあと数回はつぶやいた記憶がある。

「まるで商売女の終わり方じゃん」

俺は、Gパンのポケットから戯れに財布を出して、「いくらだ、ねーちゃん」と小声で言った。濡れて萎れた一物が哀しさを助長してやまない。

ベッドに座りしばらくの間バスルームのドアを凝視していた。俺がここに居る間は出てこない。そんな気がした。

「しなきゃよかった」

ようやく裸を被い、愛機ニコンを肩にすると靴を引つ掛けるようにしてドアを押した。帰ったと優布に伝えるために、わざと音を立てるべく、きつく閉めた。

このあと、何をする気力もなくなり、大学にも行かず自室に引き籠もった。腹は減るので近くのコンビニには行く。最初の一週間は今までに撮ったネガとポジの整理をした。次の週はモノクロ写真を見ながらゴロゴロと無為に過ごした。この間も若い肉体は精液を造り続け、早く使え、早く出せと督促を止めない。そのたびに優布を想って、と言うよりは、優布の体を思い出して処理をした。体外に排出されたスペルマを見詰めているうちに、それが愛の証でもなく、男から女への想いの使者でもない、ただの分泌物であることに気づいた。唾液や涙(はな)や尿や汗との間に何ら違いがないことに……。

では人は、男と女は、一体何で繋がっているというのか。それを知るためにも優布に逢わなければならぬ。

「よし、何の蟠(わだかま)りもなしに、マンションに行こう」
そうすれば分かるかも知れない。そう思った。

一カ月ぶりにマンションのドアを開け、優布の寢室の前に立ったところで、文字通り自分の目を疑った。一分近く瞬きをしなかったような気がする。

ベッドではなく二人は床の上でしつかりと獣のように繋がっていた。幸いなことに、屹立しているであろう翔のシンボルは見えない。優布のホットボックスが上からそれを銜(くわ)えているからだ。毛細血管まで透けてみえそうな、まばゆいほどに白い太股が、翔の下腹部を挟み込んでいる。夜昼自慰の間で何度も想った優布の恥毛が、いま、現実にも四、五メートル先で濡れ光って乱れ、上下左右に揺れている。半眼で頬を染め、口を半ば開けて白い歯を覗かせている優布。アデーレ・ブロッホ・バウアーだ、目の前の淫婦(おんな)は、彼女が傾倒する画家グスタフ・クリムトが描いた「ユディトとホロフェルネス」のモデルそのものだと思った。いつだったか優布は、乳房を見せ恍惚とした表情を見せている絵を指差しながら「クリムトはさあ、この女の淫乱さを見抜いていたと思う」と射るような眼差しで俺を見た。「それでいて画家とモデルの奔放なセックスを楽しんだのよ」そう言っただけで舌を出し、肩をすぼめた。『見えてるはずだよな、俺が』翔からは無理だ、大きく仰(の)け反りでもないかぎり視線はこちらに向かない。彼のことで、犯されている女のように目を閉じているのかもしれない。優布には仁王立ちしている俺が絶対見えている。いや、と即座に否定する自分がいた。そうなら驚いて翔から飛びのき、手当たり次第に見え見えの嘘を並べて取り繕うはずだ。そうしてくられたら、どれほど救われるだろう。俺は心臓の鼓動で時を刻みながら、いつまでもその「時」を待った。そのうちに自分の中に小さな不思議を見た。俺はいつのまにか、愛機ニコンのレンズに唾を塗り、次いでファインダーを覗き、優布の痴態をソフトフォーカスで写し撮ろうとしていたのだ。翔の肉体は当然フレイミングで外す。ストロボが弾けたとき、よりハイキーな優布の裸体がフィルムと俺の網膜にしつかりと焼き付いた。

ストロボの光で仰け反るようにして俺を見た翔の目は、驚きと後ろめたさが縞(な)い交ぜになり、両の目の全体が白濁しているように見えたものだ。

その場を黙って立ち去った俺は次の日、翔の棲む、プレハブの『コロニー』を訪ねた。いまならばつきりと言える、「お前はまわりに臭気を放つ以外能のない、薄汚い病人だ」と。

「合意の上です、圭さんにそこまで言われる覚えはありません」と翔は髑髏(どくろ)のような顔を突き出した。

「どうやって頼んだ、やらせてくださいって、土下座でもしたのか？」

この台詞にはチクリと胸が痛んだ。矮小化した自分が惨めだった。しかし、いったん動きだした舌は止まらなかった。

「優布が、あの優布が、お前なんかと本気でセックスすると思ってるのか、遊びだよ、好奇心、じゃなきや哀れみ」

言い募りながら涙が噴き出た。

「勘違いして俺の女だなんて吹聴したらただじゃおかないからな」

「圭さん、僕はいい。何を言われてもいい。けど、いま口にして言っている言葉は、僕じゃなくて優布さんに対する、取り返しのない侮辱ですよ」

「立派だよ、俺と違って筋が通ってる。だけど翔、いいかあ、お前は俺の大事なものを、つまり優布を壊しただけじゃなくて、俺が優布を大事に想ってる、その心を壊したんだ、忘れるな！」

「大事になんて想ってませんね、圭さんは」

「お前なんか何が分かる」

「聞きましたよ、僕。圭さんが優布さんを抱いた日、なぜ黙って帰ったりしたんですか」

「優布が直接言ったのか」動揺が襲ってきた。

「バスルームから出てきた彼女は、きつく閉まるドアの音を地獄の門のそのように聞いたそうですよ。しかも一と月もの間ケータイ一つ掛けてこなかったって」

「逆だ、思いが……」

その先は言えず、口だけがパクパクと動いた。

「泣いてましたよ、優布さん。圭さんが自分を娼婦のように扱うとは夢にも思わなかったって」

「あいつこそ、優布こそ、俺を大勢の男の中の一人としてしか見てなかった、ワンノブゼムだ俺はあ、あの事務的なセックスがその証拠だ、バージンじゃあるまいし」

「バージンだったそうです、優布さん」

「な、な……」

あの優布が？ あれほど性に関して奔放そうだった彼女が？

「圭さんが初めての男だそうです」

「嘘だ！」

思わず大声を出した。頭の中が真っ白になっていくのが分かった。

圭が蔑むような目をして首を振った。

「いったい優布さんのどこを見ていたんですか、彼女の何を知ってるっていうんですか」

「同情するふりをして犯すような男が……」

「いいから聞きなさいよ！」

初めて見るパワフルな翔に圧倒された。

「優布さんは妊娠してもいいと思ってましたそうです、あなたと」

「じゃあ、一と月足らずでお前と寝たのは」

「あなたとのセックスを心の中でご破算にするためです。僕は頼まれたんです。でも、優布さんの切羽詰まった気持ちを想ったら立ちませんでした。だから儀式みたいなものです。インサートも出来てません」

あの光景が儀式、みたいなもの……

「それでも僕は彼女に抱かれ彼女を抱いたつもりでいます。幸せな気持ちでいっぱいです」
俺の中で何かが瓦解していく音がした。

「僕はあと何年も生きられないでしょう。だから、女の人とのセックスも頭から諦めていました。いまは違います。優布さんのことがあるからです。性器はつながらなかつたけど、心がつながったから。いえ、彼女からつなげてくれたから……」

翔の目が涙で膨れ上がるのが分かった。

「あのとき……」

翔の涙が光りながら垂れ下った。

「写真なんか撮って、さつきと帰った圭さんはバカだ。ほんとに好きなら怒って興奮して頬の一つも叩いて、罵ってくれてたらって、泣いてました優布さん」
頭を抱え込むしかなかった、俺。

「僕も圭さんに足蹴（あしげ）にされたかったです」

翔が涙をかむ音が聞こえた。

「そしたら、きつと、優布さんと圭さんのセックスが、その意義が、生き返ったと、僕は思います」
隣の家の犬だろうか、急に激しく吠えだした。

『バカ犬があ』

そのほかに罵る言葉は、もう無かった。

翔はそれから間もなくして、突然に逝った。

表だった葬儀は行なわれず、密葬と決まったものの身内の弔問客すら疎(まば)らだったと聞く。

優布と俺は、彼の遺言ということで、遺骨になってから死亡の事実が知らされ、「ご迷惑とは思いますが、故人の遺志でございますので、遺影に会ってやっていただければ幸いに存じます」と、母親から「依頼」の電話を受けた。

相当大きな家なのだが、畳一枚分ほどの広さの場所に遺骨と花と遺影が置かれていた。焼香をする優布は、礼服に身を固め、所作もきれいで、何よりも気丈で凜としていた。俺の方はひどかった。カメラを下げて街中を闊歩するいでたちそのまま、しかも焼香をするにも手が震えて止まらなかった。結果的にはあるが、死を前にした翔に、有りつたけの罵声を浴びせたのだ。しかも腐った自分の自尊心を護るためという、情けないほどちっぽけな目的のために。唯一の救いは、遺影が俺の撮ったスナップ写真をトリミングしたものだだったこと。業者にしてはうまく処理している。きっと症状が明確になってからは、写真など撮られたくもなく、また、撮る人もいなかったのだろう。

「すみませんが、プレハブ、見ていいでしょうか」と傍で正座をしていた母親に聞いてみた。愛読していたボードレルの詩集でも形見にもらえたらと、そんな気持もあった。

「消毒して、壊してしまいました」と乾いた応えが返ってきた。

「じゃあの、山のような本は？」の問いにも、「すみません、すべて焼却処分に」とまるで淀みがない。

不愉快で吐きそうになった。

「あいつ、は、翔は、お母さんの息子でしょう？ どっかの疫病神と一緒にですか！」
声が裏返った。

「わたしはあの子を産んだ責任をとっただけです」

母親の目が「あなたに何が分かるんです」と付け加えた。

「失礼しましょ」と優布が俺の脇腹を突つき、鋭い目付きで睨んだ。その怒りは俺に対してのものではない。

「結局形見一つ残さずか」

表に出てから思い切り唾を吐いた。

「わたしはもらったわよ」

「何だ知ってたのか、死期が迫ってたこと」

「うん、圭がもらったのと同じ形見だけ」

心の中に翔が残していったものだけ。そういう意味だと、それくらいは俺でも分かる。

「病名、あいつから聞いてたんだろ」

「うん。でも忘れた、病名は翔の苗字でもニックネームでもないしね」

「……なるほど。さすが優布だ」

「気持ち悪いわね、おだてたりして」

優布が俺のシャツの端を引っ張って児童公園に誘ってゆく。俺は不思議な嬉しさに満たされた。

丸太のベンチに座ろうとする優布に、「おい礼服だぜ、待てよ、ハンカチ敷くから」と慌てる俺。

「脇毛の話、思い出さない？」

俺のハンカチの汚れ具合に呆れて拒み、そのまま腰を掛けた優布が、唐突に笑いだした。

「ああ、体毛は性的な場所に残ってるってあれな」

「翔ったら、あの真面目な顔で」

「丁寧語で」

「そうそう。そうですか、それで女の人は必死で脇毛を剃るんですねって」

「三ヶ所に毛があったら男が入れる場所に迷う」

二人で同時に吹き出した。

笑いの後に、かなりの長さの沈黙が訪れた。

「何でも分かかって素敵な人だったわね」

「俺より？」

「もちろん。圭は無駄なエネルギーばかり」

「ひでーな」とは言ったものの当たっていると思った。一つだけ聞いておきたいことがあった。頬

の一つや二つ叩かれるのを覚悟で。

「死ぬって分かったから翔とセックスしたのか」

「好きだからよ」

表の言葉だけで計れる女ではない。

「もうすぐ死ぬ男となら誰とでも寝るのか」

「それもいいわね」と険しい顔で、語尾を上げた。

馬鹿なことを言っているとは思ったが、照れ隠しのレパトリーはあまり広くない。

「こども、できなかったか、俺の精子で」

半ば本気で質問してみた。

「できたわ」

「嘘だろ！ 優布」と、口走ってしまっただから慌てて口を塞いだ。

「嘘よ」と、優布が、瞬きを止めて遠い目をした。

プロフィールが孤独感を露にしている。妖艶だと、心から思った。

「なあ、バージンだったって、ほんとか」

「それも翔が圭に残した形見？」

「優布がそんなにもてないわけじゃないじゃん、なあ」

「星の数よ」

「……そうだろうなあ」

「できたけどすぐ墮ろした。こ・ど・も」

「ええっ！」と丸太からズリ落ちそうになった。

「嘘……」と間髪を入れずに優布。

ハツとした。優布の目に涙がたまっている。

「男も女も、親も子も、自分も人も、みんな嘘だらけ」 優布の掌が招くようにして俺の掌に触れた。

弱い風が二人の身体の間を擦り抜けていった。

「みんな死ぬのよね、翔みたいに」

「バカなこと考えんなよ、俺たち若いんだぜ」

男らしく睨んでみた。これほど危なげな優布は初めて見たような気がする。よりいっそう愛おしくなった。

「きょうの圭、あつたかいじゃん」

いま、優布が俺の中で更新をしている。

「夢だ！ つねにただ夢だ！ 魂が、野心にあふれ繊細になればなるほど、夢は魂を、現実的な可能から遠ざける」※②

翔が空の上からボードレールの詩を誦（そらん）じているような気がした。

「圭……」と優布が意を決したように立ち上がった。

俺の掌を優布の柔らかい指が滑っていき、ついには離れていった。

「せつかく翔が逢わせてくれたんだけど、もうこれつきりにしましよ、わたしたち」

一瞬、冗談だと思い、片頬で笑った。

「三本脚の鼎ってね、もつとも安定してるらしいの。でも一本を失えばおしまい、倒れるしかない」

「あいつが来る前は二人きりだった」

あの時に戻ればいい。そうだ。翔がいなければ何の問題もなかったのだ。

「わたしも圭との二人きりを心のどこかで自慢してたわ。でもね、翔が来て、それが実は独りぼっちなんだって気づかされたの」

優布が一気に公園の端まで飛び去ったように感じた。少なくともズームを引いたのは……俺じゃない。

『だから何だってんだ！』

翔の章

キャンパス中央に大きなモミの木が聳(そび)え立っている。数年前までは毎年クリスマスツリーの役目も果たしていたという。

手元の詩集の束は、一時間声を嗶(か)らしてもその重さを減らしてはくれなかった。

「手製で格好は良くない詩集ですが、読んでいただけませんか」

何十組もの二人連れが目の前を通り過ぎた、決まって僕の手前でいったん立ち止まり、大きく避けるようにして。詩集と聞いて走り寄った女学生が、掌で口を塞ぎあわてて引き返したこともあった。

「一部わたしにちょうだい」

後ろでそんなに大きくはないけれど、しっかりとした声があった。

おどろいた。振り向くと女性は笑顔だったのだ。

絵の具のシミを模様にしたような柄のTシャツにジーンズ、ライトグレーの薄い上着を羽織っている。

「どうしたの。はやくちょうだい。ここの学生じゃないとだめなの？」

「いえ、すみません、あなたがあんまり可愛かったので、つい」

自分には似合わない気障(きざ)な言葉が、勝手に口から出た。

「ありがと。やっぱりポエムの人ね、君」

「すみません」

「謝るの、変だよ、せつかく褒められたのに取り消された感じ」

語尾が優しくはねあがっている。

白目が何の濁りもなく、まつ毛が長い人…。

パソコンで綴り、自分の部屋でプリントアウトした三ミリの厚さもないA五判の紙の束が、初めて出会った女性の手に渡る。

鼓動が少し乱れた。

詩集を落とすまいと左の掌を出したとき、女性の手の甲に指が触れた。

「すみません、わざとじゃありません」

逃げられると思いい、とっさに頭を下げた。

このとき僕に向かって発せられた彼女の言葉を一生忘れない。

「君のスママセンは相手の人格を傷つけるね、きつと。無意識かもしれないけれど。相手がどう受け取るかを勝手に決めて、相手が下卑(げび)た人間だと評価してるみたい。すこし不遜じゃない？」

非難をしているのに眉間に皺も寄せず、口も歪めない。少し首を傾(かし)げて、不思議そうに瞬(まばた)きをしただけだ。

自分を卑下しているのは確かだが、相手をバカにしている気はさらさら無い。それなのに目の前の女性は、そうなっていると言う。

「あ、またスママセンて言いそう。だめよ」

「はい」

ふたり一緒に、声を殺して笑った。

その翌々日だった。

「やっぱりまだ居た」

同じ場所で相変わらず詩集を配ろうとして立っていると「彼女」が寄ってきた。

「こんにちは」

それしか言う台詞がなかった。

「すこしは出た？ 詩集」

「いえ、全然」

「君のその顔とその格好じゃ、そうだろうなあ」

「えっ」と声に出した。その通りだとは自覚はしているが、顔、容姿（かたち）の難点を真正面から口にする人だとは思わなかった。

「怒ってもいいよ、わたしになら。いつも言われていて、というか、自分でも思っていて、一度だつて怒りを爆発させたことなんて無いんですよ。君のスママセンはそこから出てるんだ」

言葉にも驚いたが、何をしているのだろうと訝（いぶか）った。

女性は、下げてきた大きな袋から折り畳み式の小さなテーブルを出して組み立てると、『詩集・死なない蟻の群れ』と大書きしたポップを天板にセットしたのだ。じつに手際がいい。

「レタリング、素敵ですね」

「ありがたい。でも美大に通ってるならフツーでしょ、これくらいは。良はもらえても優は無理だわ。あ、そうそう、わたしの名前は優布（ゆう）。優しい布って書くの。意味の方は優れた布だけだね。さ、

この上に詩集ドサツと置いてみて」

「はい」と従う僕。

「ところで君は？」

「文学部の翔（しょう）です。柴田翔の翔」

「良かったよ、詩集。少なくともわたしには響いた。だから読者ゼロはもったいないと思って。どうしても自分で手渡したい？」

「いえ、こういう方法、思いつきませんでした」

「ここに置いて君は現場から去る。これ必須よ。詩集ってね、無料でも興味のない人は持っていないかないの。正規の装丁本ならもって行って古本屋で換金て手もあるけどね。無名の詩人でも興味のある人は手にするわ。だけど、そういう人は詩とか短歌に特別なイメージをもっているから、配り手が君だと、それが壊れちゃうのよ。だから何日ここに立っけていてもゼロ。そう結論付けたの」

腹が立ってもよさそうな内容だが、気が付くと僕は何度もうなずいていた。

「解かってもらえたなら、行こうか、ちようどいい時間だし」

「あの…」

「お昼ご飯。一緒に食べよ、学食で。ここの学生でなくても平気よね」

「はい。いまテーブルに付けた手製のポストですけど」

「ああ、そっち？ 読後の感想欲しいでしょ、だから」

「くれないと思いますけど」

「そんなことないわよ、いま私のをこれ見よがしに入れておくから。見本、は偉そうだし、エサかな」

つくづく不思議な女性だと、溜め息が出た。

『頭で創る蟻の詩（うた）』

むさぼるのは自分の口。

消化できずに反芻し

終(つい)には吐いて、出す酸っぱいものは
すでに死んでる己(おのれ)の想い。

嘲(わら)われて逃げる獣(けだもの)に似て
屍(しかばね)なのに動く醜(みにく)さ。

その果ては
ありもしない心に巢食う』

学食で優布は、カレーを白い飯にかけ直しながら、僕の下手な詩を暗誦した。

「凄(すご)いってほどじゃないけど、読者次第でけっこう来る詩ね。翔(は)は心、ほんとはどこにあると思って
るの」

「頭(かぶ)がすべてを司(つかさど)ってるので、頭(かぶ)の中(なか)でしょうか。ふつうは、ですけど」

「翔(は)の場合は？」

「逃げ場(逃げ場)無いですから、結局(結局)心(こころ)はありもしないもの」

「どこにも逃げ込(こ)めな(な)いってことは何(なに)」

「日(ひ)浅(あ)くして死ぬ(し)ぬから(か)らです。頭(かぶ)も焼(や)かれてなくなる」

「そう(さ)うかあ、重(おも)いね。わたしは血液(けつ)の中(なか)だ(と)思う。器(き)官(くわん)とか部(ぶ)位(い)じゃなくて、固(こ)定(てい)的(てき)な形(かたち)が無(な)くて日(ひ)々(ごと)動(うご)いて、人(ひと)間(ま)を深(ふか)いところ(ところ)でコン(コン)ト(ト)ロー(ロー)ル(ル)して(して)る。それ(それ)が心(こころ)だ(と)思う(思う)から」

「はー、血(ち)が心(こころ)の棲(す)家(か)(すみか)、です(す)か」

僕(ぼく)は温(ぬ)かい(と)んどん(と)と一緒に(いっしょに)優(ゆう)布(ふ)の「学(がく)説(せつ)」を呑(の)み込(こ)んだ。

「人を躍動させるのも、委縮させるのも、恋に燃えるのも、失恋して落ち込むのも、人を傷つけて冷えるのも、死の恐怖に怯えるのも、みんな心の在り方しだいなんけど、全部血の動き、働き。血を失うことは心をうしなうこと。そう思うから」

「面白いとらえ方ですね」

「思い付きよ、バカみたいな」

子供みたいに舌を出した優布。

「あ、それより日浅くしてって何？ さっきの」

口にすべきかどうか迷った。言つたとたん、優布が一瞬にして遠ざかるような気がした。

「僕、難病なんです。少なくとも現在の医薬では完治できない。不自由な生活と早く死ぬのが約束されているようなものです」

言ってしまった。

出会つたこと、話をしてくれたこと、一緒に食事をしてくれたこと、全部が夢の中のことになる。そう思うと、ぽつんと独りに戻るといふ恐怖が消えていくのを感じた。

「この顔つきもそのため。ミオパチー顔貌（がんぼう）って言われています」

優布が瞬きを一つした。

『さみしげな表情がより一層この人をきれいにしている』と、唐突にうなずいてしまった。

「じゃあ、ご両親のどちらかが？」

原則遺伝で起こる病気だと、この人は知っている。病名はまだ言っていないのだ。ミオパチーだけで解かつたのだとしたら、この人は凄い。

「僕のは例外で突然変異らしいんです。両親とも普通の人です」

「あ、それド・フリースの学説。違った？」

「優布さん、それ進化論でしょ。僕のは救いようなない難病、発病の源の話ですから」
無理に笑顔を作った。この人なら、そんなこと百も承知で話を軽い方へもっていつている。そんな気がしたのだ。

「大丈夫よ、難病とか不治の病とか言ったって、その時点ではってことなんだから。結核もハンセン氏病も癌も不治だったのに克服してきたのよ、医学は」
嬉しかった。

不思議な予知感覚だった。涙が目に溜まり、鼻腔に水っ漬が滲み出てくるのを感じた。
驚いた。気が付くと目の前に、淡いピンクのハンカチが差し出されている。

受け取った瞬間、予知通りの液体が溢れ出した。
「ごめんなさい、汚しました」

「君の心が出したものを汚いとは思わないわ。ちゃんと存在して、立派に働いてるじゃん、きみの心」
優布はスプーンでカレーライスを掬(すく)い取ると、大きな口を開けて、にっこりと笑った。

教授が出した課題は、「ヘンリー・ワーズワース・ロングフェローにおける愛と死」だった。アメリカの詩人だ。僕は先ず図書館で資料を漁(あさ)り、『矢と歌』を読み、英文を小声で口ずさんだ。随所に韻をふんでいて流麗だった。日本語訳では当然不可能だ。文字なら目立たないものを、声に出し音にすることで、両者はまったく別物になってしまふ。詩集は借りてきたが、興味は湧かなかつた。高校か中学かは忘れたが、たしかに一度口にしたことがある詩だ。すこしバカにされたような気がしたのだ。

僕はボードレールが好きだ。自分に合っている。いや、僕そのものだとかさえ思えるからだ。

『おれは、傷口にして短刀

おれは平手打ちにして頬

おれは車攻めの手足にして刑車

犠牲者にして死刑執行人』※③

タイトルも『自分自身を罰する者』だ。これは口遊（くちずき）むたびに涙が出てくる。

たった二冊だけれども僕の詩集が減った。もちろん誰が持って行ったかは知る由もない。優布のと合わせて、これで三冊だ。胸が弾んだ。自分の中の何かを他人に発信できた。実は「何か」ではなくて「これ」があるのだが、伝わるかどうか不明な以上、そうとしか言いようがない。

読後感は優布のだけで十分だと思っただけで持ち帰った。「エサ」として現場に残しておくより、手元に置いて、大事にしたいのだ。

『死なない蟻の群れ、の蟻って君の心の中に巣食っている自虐の虫のことだよ。ね。

自分の心と体を自分の手で切り刻む快感が伝わってきました。治療もできず、癒しもできない傷の痛み。それはきつと、叶わぬ恋に身悶えする傷のそれに倍する快感でしょうね。

同じ想いを抱く人たちの胸を突き刺す詩集です。

自殺を考える読者も出そうね。素敵でした。優布』

何度も読み返した。

もっと深く知りたい。また会ってくれるだろうか。一緒に食事をして、いろいろ話して散歩して……。空想するだけで心慄（しんき）が充進した。呼吸も乱れた。薄汚れたベッドの上でのたうち回り、最後はぐったりとして動けなくなつた。

『解かるんだ、あの人、優布さん』

目に映っている天井板が霞み、熱いものが目から溢れ出した。そのとき、
「翔！」

ドアが開くのと母の声が同時だった。

十畳のプレハブ全体が揺れたような気がした。

「出入りは勝手口からにしてって何度言ったら分るの。さつき玄関ですれ違ったのは。パアの大事な取引先の人だったのよ、冗談じゃないわ。帰ってきたら、真っ直ぐにここに来て、用事はインターホンで済ますこと。いいわね！」

「それじゃあ、この家（うち）から出ていけって言うのと同じじゃないかー」

「出ていきなさい、どこへでも。これでいい？ それができないから、長期入院先を探してるんじゃない。それをでもないのにフラフラ出歩いて。大学行くの認めてるだけでも感謝しなさい」
ゆっくりと身を起こし、母を睨んだ。

「ママのせいでもあるんじゃないの、この病氣」

「遺伝じゃないって知っててよく言うわね」

「妊娠中とか、乳幼児の頃に何か原因がってこと、考えられるよね」

他人に嫌がられたり、蔑まれたりするのはいい。実の母親に責められるのは辛いし、それ自体理不尽だ。そう思った。

「罹った病氣はあくまでもあなたのものよ。とにかくこれからは気を付けて」
急に声のトーンが落ちた。

「夕食はヒレカツにしたから。取りに来ないで待ってるのよ、いいわね」

以前はこんな母ではなかった、発病した後でも。背中でものを言う人ではなかった。ドアが意志でもあるかのように自ら閉まった。

「犬と一緒に、僕は！」

手元にあった本をドアに向かって投げてみた。力及ばずベッドの端先に落ちた。

「アイシヨットアンナローイントウージエア、か」

課題のために、のそのそと這って拾いに行った。

一と月前のことだった。母が食器を取りに来て言った。

「翔、あなた何を目指して大学に行ってるの。一度聞こうと思ってたの」

「何って……」

いつも自分自身に問いかけていることだった。この先何を修めても、「確実な死」がせせら笑うだけだ。就職は不可能。「手に職」も無い。だから収入を得ることも叶わない。結婚も、子を生(な)して自分の命を将来につなぐこともできない。いまよりも一層醜くなって、体のあちこち動かなくなつて、死んで、焼かれて、影も形もなくなつて。誰からも忘れ去られて。いや、「死んでよかつた」って喜ばれて。そんな自分が、何を学ぶというのだろうか。

「死ぬまでの慰め、かな」

口が勝手に言葉にした。

「情けない」

いわく言い難い顔を創った母。

「学問でそれが可能だと信じてる訳？ 慰めてもらえるって」

「わからないよ、そんなこと。だけど、じゃあ、何をしてろって言うの」

「だから！ その程度なのね、翔は」

「何の期待もしてないくせに」

「ボードレールが好きなら、読みこんで、研究して、新しい解釈で本を出して世間に挑むとか何かあるでしょ。出してあげるわよ、それなら」

「いまこうしても突然死ぬかもしれないんだよ。ママに解かるの、この感覚」

「明日死ぬかもしれない、人生いつ終わるかもしれない。そんなこと、人間誰だって一緒よ。そうだからって、世の中の人の全部が全部、死ぬことばかり見つけて暮らしてなんかいないの。甘ったれるんじゃないわよ」

「僕だって見つめたくはないさ、第一誰がこんな体にしたんだよ」

「それを言うの、パラサイトが…」

驚いた。気丈な母の目に涙が溜まっていた。

「なぐさめなら、お金あげるからどこかで女でも抱いてきなさい。何ならママでもいいわよ、翔が死ぬ前の日ならね！」

出ていこうとしてドアの方へ顔を振った母の目から、涙が飛んだ。

落ちていく液体の光る軌跡が、不思議なことにスローモーション画面のように、しっかりと見えた。

あのとときもブレハブ全体が、大きく揺れた。

「優布さんかあ…」

『矢と歌』を手にしたまま僕は、ドアを背にして直角に折れ曲がった。

「来てもいいわよ」と、優布が何の抵抗もなく自分の部屋に招待してくれた。出会ってから一週間も経っていないのだ。

「だって一人でそのマンションに住んでいるんでしょ、ほんとにいいんですか」
確認せずにはいらなかった。

「もう一人来るかもしれないけど、それでよければ」
当たり前なのに少し落胆した。

「男性よ、楽にしている人」

「恋人、とか」と、さぐりを入れた。

「ともだち、翔と同じよ。カメラマン志望の学生」

「初体験でちよつと怖いですね」

本音だった。本と壁相手に独白していた日々は、気が遠くなるほど長かったのだ。

「毎日、自分の死と対話している翔が何言ってるの。彼は死神に比べたら赤ん坊みたいなものよ」
言葉がきついときは必ず笑顔だ。

もつとこの人のことを知りたい。その欲求が迷いに勝(まさ)った。

優布のマンションで圭と名乗った学生は、たしかに格好がよかった。ルックスでは足元にも及ばない。しかし饒舌にすぎる圭の姿を冷静に見つめていて、気が付いた。一つ、優布のことを相当に好いている。二つ、外見(そとみ)とは違って、本当は劣等感の塊(かたまり)だ。

気づかれないようにするにはするが、信を置けない人間と踏んだので深く付き合いたくはない。もつとも圭の方でも同じだろう。彼にとっては、僕と交流するメリットはない。優布の前で、自分を惹(ひ)

きたてる役には配せるだろうが。

僕は、具体的な個人に対して初めて、対抗心を抱いた。恋や愛でというのではない。圭に勝るものが自分の中にあると確信したからだ。発病して以来、籠っていた間に万巻(まんがん)に接した。生死(しょうじ)のことで日々悩み、それを解こうと七転八倒もした。少々曇りすぎた心のレンズを、優布に磨いてもらいたいという想いもある。いや、恋でいい、気取るのはやめよう。たとえ成就は叶わないにしても、思い続けることはできる。持論かもしれないが、報われることのない「片想い」こそ純粋な恋だ。性を超えるプラトニックこそ至上の愛だ。僕はそこに向かうのだ。

『優布さんにこの男、圭は似つかわしくない』

直感でそう思った。もっと素晴らしい男に抱かれてほしいと、その場で拳(こぶし)を握った。

初対面の後、意外にも圭は、優布抜きで二度も僕に会おうとした。しかも驚くなかれ僕のプレハブ小屋にも来たのだ。

何のために、先々優布の前で侮蔑する下準備なのか。

僕への同情にはお為ごかしの臭いがした。

そして終(つい)に忌まわしい日が来た——

圭の下宿先で優のヌード写真をこれ見よがしにされた。しかもパネルにして壁にかけていたものを。

優布の、男を誘(いざな)うようなプロフィール、細くて壊れそうな首、乳首乳房のライン、ウエストのくびれ、下腹部の流れ……。僕は立ち尽くすしかなかった。

僕だったら、あの優布さんをこんな風には撮らない。

『なぜこんな男に撮らせたの、優布さん』

「アートじゃないって言うのか、きれいに撮れてるだろ、優布が、この上もないほど。否定しないでくれよな、優布と俺の、最高傑作なんだぜ、翔」

「アートです。きれいです。でも、そういうことじゃないんです」

「おい翔、お前嫉妬…」

涙が一気に噴出した。目の前の頭の軽い男はどうでもよかった。この種のヌードを撮らせた優布が哀しかった。失望とか軽蔑とか、そういうことではなかった。専攻は美術なのだ。欧州の美術の歴史はヌードの歴史ということも知識としては知っている。何かが違う。いや、狂っている。そう思いたかった。

道々、涙を垂れ流しながら歩いた。

すれ違う人たちが、避けながら皆が皆、音のない蔑笑を送ってくる。それだけが救いだった。いや、快感だった。

なぜ逃げ出したのか。僕だけが知っている。悪魔的に妖しかった優布の裸体に、自分の下半身が反応しただけからだ。

何のことはない。最も下種(げす)で、一番汚いのは自分だ。圭に気付かれたら終わりだった。彼は絶対に告げ口する、優布に。それは耐えられない。でも、もう自分を偽れない。

自分の肉体が、精神の欺瞞を嘲笑したのだ。勃起という方法で。もう逃げ場はない。醜い自分から逃げるすべはない。そう思った。

外見(そとみ)は何事もなかったように、圭と会い、優布とも「交際」を続けた。

この間主治医のいる大学病院に出かけている。

たまたま急な講演があったとかで、主治医の代わりに三十代の男の先生が対応してくれた。

言葉少(ずく)々な人だったので、何か質問しないといけないような気がした。きつと手術前のインフォームドコンセントなんかも苦手なタイプだ。

「先生、最近なんですけど、肩から二の腕にかけて細くなったような気がするんですけど」

「ポパイの腕かい。前腕はそのままだ。ちよつと進んだかもな」

「もつとひどくなるんですか、これ」

「うーん、進行速度はかなり個人差があるんだけどね。肩や腕だけでなく、腰とか脚にも影響が出てくる可能性はある」

「腰」のところで次の質問が決まった。

「セックスはできるんですか」

先生が目を丸くした。

「性交能力かね、それとも子どもをつくれるかどうかの方かね」

「こどもは望みません」

「だろうね。きみの歳ならもう自分で確認済みじゃないのか、勃起や射精の方は。異性相手じゃなくても」

その通りだった。なぜこんなことを訊(き)いたのか。頭の中を優布の「裸体」が過(よぎ)った。

その手の雑誌は、食事を運んでくる母に見えるように、ベッドサイドに数冊散乱させてある。形を変えた母への嫌味で、人間としても最低なやりかただと自覚はしている。

「この先もずっとという意味なら。なにぶん臨床例が足りないんでね」

僕の沈黙をなにやら勘違いしたようだ。

「ぼくこそ、すいません。先生に何うようなことじゃないですよね」

「いや。ま、エレクトロンは筋肉でするものじゃないからね」

先生が大真面目な顔で言った。

平穩に過ぎていった日々は、教授がくれた課題のお蔭かもしれない。好きではない詩人に関する小論文は乗り気がしなかったが、だからこそ、時間をかけてまじめに取り組まないと書けなかったのだ。ある日、優布から連絡が入った。

会いたいからマンションに来てと言う。喉でも壊したように、声が低く、沈んでいた。

訪ねると、圭が娼婦のように自分を扱ったと言つて泣いていた。僕は記憶しているあらゆる識者の言葉を引いて優布を慰めた。二時間以上を費やして。そのなかには付け焼刃のロングフェローもいた。残念ながら経験に基づく自分の言葉は、何一つ口に出れなかった。

途中優布が顔を上げて笑い始めるような気がして、何度か黙り、様子を窺(うかが)いもした。

性体験など一度もない。恋愛経験も同じだ。そんな男が、現実には結ばれた男女の、しかも大好きな女と大嫌いな男とのセックスそのものや、互いの恋心の有無やその深さをどう語れと言うのか。

僕は自分が、薄っぺらでちっぽけに感じられてきて、心が萎(な)えてきた。

「優布さん、ごめんなさい」

「いいの、分かっている。ごめんね、心のゴミ捨て場みたいに翔を扱っちゃった。わたし、初めてだったの。だから感情のコントロールが出来なくなっちゃって。自分の理性に対する冒瀆(ぼうとく)よね、こんなの。みつともないと思う」

目の前に何度も涙を拭う優布がいる。

抱きしめたかった。その後で、真正面から彼女を見つめて、何度もうなずいてやりたかった。

『その顔で？』と、冷めたもう一人の男が言った。最初は自分自身がその男だと思って眼を閉じたところが、黒い瞼の裏によくよく見えてきたのは圭だった。ゆがんだ顔で、薄ら笑いをしている。

『この男とやったんだ、優布さん』

心臓がゴトゴトと大振れを始めた。女のこと動揺しなくても、いつどうなるか分らない心臓が。優布さん、僕、帰ります」

やっとのこと言葉をつないだ。

「ごめんなさい、翔。来てくれてありがとう」

優布の目からまた涙が落ちた。

無性に腹が立った。理由なんかわからない。

「自分がしたことじゃないですか、何泣いてるんですか、そんなの、優布さんじゃないですよ」
優布の視線が僕の目に固定された。軽くだけれど唇を噛んでいた。

『これで終わっちゃった』

真っ直ぐにドアまで走ると、外へ出た後、背中、ゆっくりと押し閉めた。

目頭が熱くなるのを感じた。

母が目の前で、眉一つ動かさずに僕の「遺言書」を読んでいる。もちろん正式な書式ではない。パソコンで、しかも横書き。サインだけで印鑑すら押していない。妻子もなく財産もないのだから、無視されても一向に構わない。

どんな表情を見せるか興味があったのに、つまらない結果に終わった。しかも、「解かったわ、それで、いつ死ぬの翔は」と笑いもせずに言ったのだ。

つまり遊びや冗談とは受け取っていない。

「いつがいいの、ママは」
僕も冷たく返した。

「早い方がいいわ、できればほかの人に面倒をかけない方法で」

「その、ほかの人の中にママもパパも入ってる？」

「当然。一つ聞いわ、この骨壺に入った後に報せる男女二人が、翔のすべてというわけね」
優布だけだと思うのだが、圭もそうなのか。

涙まみれの優布を見た日の一と月後、僕は優布と結ばれた。それで圭との悪夢が消えるならと応じた僕。圭が秘密をもったのなら自分も、という気もあつた。残念ながら様々な想いが錯綜して性交そのものは不首尾だったが、温かく優しく触れ合ってくれた優布は、まるで女神だった。圭のように犯罪もどきでなら別だが、普通ならどんなに願っても叶わないセックスだ。

現場を見られ、写真を撮られ、日を変えて圭に、これ以上は無理というべき面罵を受けたが、優布との心の繋がりの歓喜の前では小さなことだった。圭は優布を愛してなどいないのだから。

その「事実」を骨になってからでも確かめたいのだ。通知をすれば、きつと揃って焼香に来る。

人間は憎しみと同じ重さの愛情を持つことができる。全部がそうだとはいわない。ただ優布はそうだ。優布は圭への憎しみだけで、あれだけの涙を流したのではないだろう。日が経つにつれてそれが解かり、僕の中で嫉妬が勢いよく育ち始めた。

「この優布って女の子を好きになつたつてわけ、か」

母が、長い沈黙の後で、ぼそりと言った。

「想う自由はあるからね、僕でも」

「後悔するわよ、翔は恋の落差を甘く見ている。いつそ何も知らず、自分の身の丈のままに生きなさい。高めれば、いえ、高まれば死ぬことが、より以上怖くなるだけ——」

「わかつてるよ！」

自分でも驚くほどの声だった。

「じゃあ、何があるつて言うんだよ、僕に。生れてきたつてことに何の意味を見出せばいいんだよ。というか。なぜ産んだんだよ、こんな体に。染色体だか、突然変異だか知らないけど」

「またぶり返すの、不毛なことを。ママのせいだつて決めつけたとして、それで翔の病気の何が変わるつて言うの。その顔、その体、短い人生。そうだとつても意義を見つけるのは自分でしょ、イライラするわね、何年そうやつてるの」

母は自分の矛盾に気づいていない。僕に何かを求め、励ましているのに、僕を否定しているのだ。

「恋愛だつて、生きる意義でしょ、違う？」

「心で止めておく自信があるならそれもいいわよ、罪でも犯されたら困るから——」

「もうセックスもしたよ」

口が勝手にそう言った。

「冗談？」と母は呆れたように首を振った。

「彼女の部屋でね」

もう戻れないと、そう思った。

「翔、まさか、レイプ」

「合意に決まってるだろ」

「うそつきなさい！」

気が付いたときはベッドから母に飛びつき、ドアに思い切り押し付けていた。

「ママ、そんなに僕が憎いの」

涙が噴き出した。

「そんなに信じられないの」

「翔、苦しい」

「まっすぐ僕の顔を見なよ、僕の苦しみが分かるように。こんな姿できれいな女の子を抱いたんだ」と、横を向いた母の顎をつかんで、真正面から睨んだ。

「食事のたびに少しずつ毒でも入れたら。別に恨まないから。気持ち悪いんでしょ、自分の息子が！」
涙に濡れた頬を、母の頬に擦（こす）りつけた。

母の体が小刻みに震えている。

僕の下肢にも震えが来ていた。押し付けたそのままの母の体に沿って、足元に崩れ落ちた。

「ここが憎い」

僕は母の下腹部に顔を埋めながら、つぶやいた。

何日かして母の「復讐」が始まった。

大病院から戻ると、部屋のドアの内側に、大鏡が貼り付けてあったのだ。

毎日毎時間、自分の醜い姿を堪能しろとも言おうのだろうか。確かに逃れようもない拷問になるだ

ろう。

さらに驚いたのは、散乱させておいたエロ本の類がすべて消えていたこと。もしやと思ひ本の山をかき分けるようにして探したが無駄だった。ある種の戦慄が走った。もう紙の上の女が居なくても性欲を処理できることを確信しているのだ。事実欲望に襲われたときには眼を閉じて、優布の裸体を想い起こせば事足りている。

母はあの日、「遺言書」をしつかり握つて、部屋を出ていった。多少の恐怖は感じたろうが、あくまでも伶俐な女であることを崩さずに。食事も常と変らずに、きちんと届いた。畏敬すら感じる。服毒の可能性を秘めた食事は、毎回スリルがあつて美味しかった。

僕は姿見に、下着まで取り去つて裸体を映してみた。

我ながら醜怪だった。頭を打ち付け、鏡を割りたくなつた。

ふと太宰の「人間失格」が口をついて出てきた。

「かよわき人の子は背負い切れぬ荷をば負わされて、どうにもできない情慾の種子を植えつけられた許（ばか）りに、善だ悪だ罪だ罰だと呪わるるばかり」

文学がこの世にあることが少しばかり納得できた。

『この体を優しく抱いた優布つて、いったいどういう人なんだ』

立場を変えてみれば分る。僕が優布だったら出来ない。生ける観世音菩薩にならなければ無理だ。優布への感謝が、恋心が、いつそう募つた。

『忘れよう。もう会うまい』

何度も心の中で呪文のように唱えた。

それが優布に対して出来る唯一のお礼だと思つた。

急にゾクゾクツツとしてきた。心臓が激しく、早鐘のように叩き、ついで下に引かれるように縮んだ。締め付けられるように痛い。

「もくろみ、どおりだね、ママ」

痙攣のあとで、目の前が真っ暗になった。

『いま、いまが一番いい』

心が安らかに消えていくのを感じた。一刹那、裸身の優布が大きく振り返る姿が見えた。

……

『優布さん、さようなら…』

優布の章

「ママ居るのおー」と、優布は歩きながら何度も大声を上げた。いくら何でも、家を出て一年足らずで戻ろうというのだ。見え見えの照れ隠しの、一つや二つは必要だろう。

鉄門扉の小さなくぐり戸を抜け、必要以上に重たい玄関の扉を開けて中に入り、上がり框(かまち)をまたいだところで、母が顔を出した。

「あら、家出娘が何の用？」

「からかい半分なのだろうが、笑顔は笑顔だ。」

「わたし戻るね、ここに」

「お引越ですか、お嬢様」

「はい。明日から三日間ぐらいで向こう引き払うわ」

「パパの差し金？ それとも得意の気まぐれかな。こんな汚れきった家嫌(や)だって言ってた優布が、どういう風の吹き回しなの。パパもママも、あれからもずっと、不健全な暮らしをしてるのよ、そうよ、清潔な娘が居なくなつてこれ幸いと、どろどろの泥まみれ」

母は前を歩きながら、背中でものを言い続けた。

それにしても、いたずらに広い家だ。狭ければすぐに顔と顔を寄せ合えるのに。「どうしても理由が聞きたいわけ？」

「ええ。パパだつて聞くと思う」

やつと歩を止めて振り向いたので、後追いの勢いそのまま抱きついた。

「ちよつと、アメリカ映画はやめてよ。第一、優布には似合わないって」
顔を上げて、母の目を直視した。

「何があつたの」と表情を和らげる母。

「もう、一緒に住めるのよ」

「だからなぜ」

私は一呼吸を置いてから、意を決した。

「わたしもシツカリ汚れちゃつたから」

「そう、なの」

「これでいい？」と、私は探りを入れた。詳しく説明したくはない。また、自分で自身の気持ちをつかみ切れてもいない。

今度は母が抱き寄せてくれた。

あれほど嫌っていた母が、いまは癒しになっている不思議——。

母がこともあろうに自宅で不倫を働いていた。噂とかさういったものではない。母が、父にはなく他の男に全裸で絡みついているのを、私が直接見てしまったのだ。

一年前のその日は、休館日であることを知らずに公立の美術館に行き、落胆して帰ってきてしまった。いつもなら、これ幸いとあちこち寄り道をするのだが、或る種、虫が知らせたのかもしれない。終日家の中に居る日ですら母は、いつも「お出かけ？」と声を掛けたくなるほどに着飾って、化粧

も完璧にしていた。それなのに、目の前にいるのは、それらを全てかなぐり捨てた肉の塊だった。

不思議だった。経験したことのない高揚を感じた。体中の血が、あらゆる血管の壁を叩きながら騒ぎ回る。そんな感じだった。動物として「素」になった男女の輝きに見惚れていた。

『クリムトのワールドだわ。きれいな…』

ドアを背に、どれくらいの間だろう、私はろくに瞬きもせず立ち尽くしていた。

果てた母が、男から体を離れた。

目が合ったときの母の言葉が今も忘れられない。

「最後まで見てくれてありがとう」

慌てふためいて股間を押さえ、ベッドから転げ落ちた男との対比。

『わたしが見てるの、知ってたんだ』

「ところでママ、あの若い男とまだ続いているの。だとしても家(うち)はイヤ。ラブホかなんかにして
くれる」

体を離してすぐに、笑顔で聞いてみた。

母は、洋画のヒロインのように肩をすぼめると、

「汚れたって言う割にはまだ、出て行った時の潔癖症は残っているのね。ご心配なく、あのときの男はセールスマン。交通事故みたいな情事よ、一回きり。パパが、優布の使ってるマンションに囲って
たのは、ラマン。一緒にしないで。もっともママは運転下手だから、いい男を見ると、性懲りもなく
交通事故起こすけど」

「いま居るマンションで愛人の隠れ家だったの」

「あら、知っててママのために女を叩きだそうって、そういう家出じゃなかったの。優布に感謝して損した」

文字通り目を丸くした。

「ママのあれはそんなに汚いとは思わなかったけど、ママの浮気を知っても怒りもしない、驚きもしない。あれがママの復讐かもしれないのに自分の浮気を反省しようとしてもしない。そういうパパは汚いと思った」

自分の中の「女」を知った今、母を悪く言うことはできない。

「そういうことだったの。ふうん」

母も「ふうん」で小鼻が膨らむ。圭が何度も私を指さして笑った特色だ。

「コーヒーでも飲む？ 優布」

母と二人、ダイニングへ移った。

「それで、パパには戻ること、言ったの？」

「うん、マンションの清掃とか、荷物の運送とかあるし」

「で、何だって？ 興味ある」

「手放して喜んでたけど、それって変かな」

母のコーヒーは旨い。香りだけで高価だと解かる。つまり腕ではない。

「医者ってね、けつこうナイーヴなのよ、外科だしね。ストレス強いし、その分癒しを欲しがるから、娘がそばにいる方がいいに決まってる」

初めて聞く母の「夫観」だった。

「おまけに養子だし、お爺ちゃんのお織維会社継がなかったし、愛人いるし、負い目の塊(かたまり)」

「そこまで言う、ふつう」

二人して笑った。

自分では短期間に嫌になるほど汚泥にまみれたと思っていたのに、その汚れが、こんなに母との心の距離を縮めた。そう思うとなぜか、哀しかった。

「で、放っておかれてるのママは。夫婦の営みの方」

「あらーっ、大人の会話！ けっこう平気で抱きに来るわよ。パパ。第一何で家の中でこんなに綺麗にして、魅力を振りまいてると思ってるの」

「もういい、自慢高慢、そこまで」

コーヒーカップで乾杯の真似を試してみた。

引越しの日、運送業者から立ち合いを求められて現場に張り付いていた。

ベッドやテレビその他入居する前から備わっていた家具たちはそのままということだったので、軽トラックで十分だった。父が気を利かせて荷造りも契約の中に入れてくれたのもヒットだ。私はほとんど何もしなくて済んだ。

ただひとつの例外は、圭の裸体を描いたスケッチブックや画布の類だ。もちろん見つかったとしても「私、美術大学の学生ですから」と弁明は出来る。それにしても、教室で勃起した性器をデッサンすることは考えられない。若い女性スタッフに好奇の目で見られたくないので、お気に入りの枕やコンフォーターと一緒に布団袋にしまい込んだ。

「ご利用ありがとうございます。出発します」

路上でスタッフ二人がそろってお辞儀をした。

「じゃ、お願いします。カーナビで実家の場所、分かりますよね」

「はい、会社にお嬢さんがこちらにいらっしやった時のデータ、ありましたし」
「そういえば前回も父が手配したのだった。」

角を軽トラが曲がるまで動かずにいた。何か大きなことが終わったような気がした。

「みんな忘れたいから帰るのか」

後ろで聞きなれた声があった。圭だ。

「俺から逃げるためか？ そんなに——」

「ええ、そう解釈していいわ。自分からは逃げたくたって逃げられないけど。それより偶然じゃないわよね」

ここでやっと振り返った。

ラフな格好の、少しやつれた圭の姿があった。ご丁寧に無精ひげまで生やしている。

「どういうこと」

「今日で三日目。だいたいこの時間に来てた」

「何のために」

「どうしてもダメなんだ、優布がいなくちゃ。何であのととき別れに同意したのか分らない。講義も写真も、めし食うことも、どうでもよくなっちゃって」

「だから、あれからの私たちとどう係わるの、それが」

少し苛ついた。

「カッコ悪いわよ。圭は、女なんて路傍の石、口笛吹けば、目の前にカワイコちゃんが一列横隊なんですよ。その中からみつুকろって」

「やめてくれ。悪かった。カッコもつけた。悪態もついた——」

「ちよつと待って。悪態って誰に。わたしには記憶ないけど」

圭の目を睨みつけた。胸の中で『もしかしたら』と言っている。

「翔に。彼にひどいことを言った。だからあいつ」

「翔、彼、あいつ？ 何混乱してるの。言いなさいよ、翔にどう悪態ついたの。第一いつの話？」

圭の顔が醜く歪んだ。

「優布と翔がセツ、…結ばれた日の翌日」

「ああ、圭が。パ。パラッチになった日の」

「違うんだって、それは」

「いいから！ 何を言ったの」

「どうやって頼んだ、やらせてくださいって土下座でもしたのか、って」

胸がズキツとした。たぶん眉根は寄った。

「優布が、お前なんかと本気でセックスすると思ってるのか、遊びだよ、好奇心、じゃなきゃ哀れ

み」

圭が放つ単語の一つ一つに心臓の鼓動が反応した。そうではないと、本当の自分に答えられるのか。

「勘違いして俺の女だなんて吹聴したらただじゃおかないからな、って」

「全部、憶えているんだあ」

何者かに右手を強く引かれたような気がする。腕が伸びて目の前の圭の顔が凹み。頬を叩く音があ

とから響いてきた。一瞬おいてから涙が溢れた。

「それを、本当に口にしたの。おなかの中で、じゃなくてえ！」

圭の胸を思い切り両掌で突いた。

「そんなひどいこと、よくも言えたわねえ、あの翔に。お前なんか死ぬと言ってるのと同じじゃない」
自分の言葉で、はっと気づいた。

「圭、さっきの、だからあいつ、の先は何」
圭が一步後ずさりをした。

「自殺なんかかって、…聞いたとき一瞬、すぐ否定したよ、そんなことないって」

「自責の念で、憔悴（しようすい）したって訳か」
もう顔も見たくなかった。

自殺：あの翔が。母親の「証言」によれば――。

翔の死後、すぐに取り壊されたプレハブの住居、焼却処分された山のような本、骨壺に入ってから呼ばれたわたしたち。焼香に行った時のあの冷たい態度。

「あなたに何が分るんです」と言いたげな母親の目。

「もしそうだったらどうするの、圭は」
背を向けて歩き出した私。

さよならも、言う気にならなかった。

何度も、大声で、名前を呼ばれていたような気がする。

「どうかなさったのですか」

翔の母親が、玄関に招じ入れた後で言った。

「もう一度、お焼香をしたくて。よろしいでしょうか」

「ああ、はい。あなたなら翔も喜ぶでしょう。どうぞ」

まだ遺影はそのまま、そこに居た。

長い間掌(て)を合わせていた気がする。

「きょうはお母さまに聞きたいことがあつて来たの」

いろいろ話しかけた後で、そう言った。

「ありがとうございます」

「こちらこそ我がままを言いました」

前回とは全く印象が違う。もしかしたら母親は翔から圭の悪態のことを聞いていたのかとも思った。もしそうなら、圭がいらない今日の、応対が柔らかいこともうなずける。と同時に、私のことも知られていることになり、赤面の至りになる。

「あの」

私と母親の声が重なった。

「お聞きしたいことが」まで合唱並みにハモった。

二人して口を押さえ、目で笑った。

これで何でも訊(き)けるとの確信を持った。

「わたしからで」と頭(こうべ)を垂れた。

「どうぞ」

「失礼なことを伺います。もちろんここだけの話ということで約束は守ります」

「ではあとから伺うことでは、わたくしも同様ということでは」

「女同士ということですね」

「ええ」と母親は、背筋を伸ばした。

「翔さん、もしかしたら自殺、いえ自殺を選んでしまったのではありませんか」
胸がドキドキし始めた。

「いえ。確かに、あの子には長い間死神がついていました。でも、これは母親としての推測ですが、あなたを知ってからというものの、生き生きしていました。何といたらいいんでしょうね。心が血を動かしている、そんな感じ……その真ただ中で自殺はないでしょうね。胸の中にも頭の中にもあなたしかいなかった。そう思います」

「では病気による突然死、ですか。筋委縮症の一種だと理解していますけど」

「医学生なのですか？ 優布さんは。あ、息子の日記にお名前がありましたので」

私のことを詳しくは綴っていなかったことになる。日記の存在自体には少し驚いた。

「いえ、美大生です。父が外科医で専門書がうちの書齋にあるので、おととい調べました。付け焼刃です」

「お医者様の……そうでしたか」

激怒されるのを覚悟で斬りこみたいと思った。

「自殺でも病死でもない可能性はありませんか」

言ってしまったから膝を固くした。殴られても叩き出されても文句が言えない質問なのだ。

母親は凜としたままで、黙り込んだ。

私はつとめて心静かに、身じろぎもしないで応えを待った。

「前回おいでになったとき」

「はい」

「私は告白したはずですよ。わたしはあの子を産んだ責任をとっただけですと」
重い。一度担ったら容易には下ろせないほどに。

「どういう意味かは確かめたりはしません」

「ありがとうございます」

「でもさつき、彼が生き生きしていたと」

「だからです。翔が一番幸せなときだったからです」

「……」

涙が溢れてくるのを止められなかった。

手の甲で拭って母親を見つめると、同じように涙目になっていた。

「大学病院の死亡診断書も、もらっています、どうか」

母親が畳に両手をついた。その意味は言うまでもない。

「お母さま、お手をあげてください」

広義の尊厳死だとは感じたが、翔本人はそれを望んでいたのだろうか。辛いけれど聞いてみた。

「あの子が優布さんと出会って、生きている素晴らしさを感じた、そのうらで何を想っていたのか。

わたしには解かりません。一方ではわたしを呪い、その一方ではわたしに救いを求めていたはずなんです。誤解のないように申し上げますが、翔がどんな死に方をしようが、原因はわたしにあります。わたしは犯(や)ったことに違いありません」

遺影の方をあらためて見た。お線香の煙が揺れて、翔の顔が少し動いたように感じた。

「わたしから、いいでしょうか、一つだけ」

私は言葉ではなく、うなずいて母親に質問を促した。

「翔は優布さんとセックスもしたと言っていました。それは本当でしょうか。わたしには信じられないのですが」

「はい、一度だけですが、本当です」

きちんと認めるべきだと思った。

「先生のお嬢様で、病気のこともご存じの、あなたほどの美人がなぜまた」

「翔さんは知的で温かで優しい人です。私の哀しみを懸命に吸い取ってくれました。抱かれないから、本気で抱かれました。他のひとがそれをどう解釈しようとかまいません。あのとき二人は心まで、一つになれたと信じています」

母親の目から新しい涙がこぼれ出た。

「優布さん……」

「はい」

「翔は幸せだったと思います。ありがとうございます。このとおりです」

小さくたたまれた布団のようになって、母親は深々と頭を下げた。

私の名前を呼んでから彼女が自ら外した座布団の上に、翔が座っているような気がした。

「冷やかに水を湛(たた)え、かくあれば人は知らぬな、火を噴きし山のあとも」

「あの、それは——」

「いえ、文学者の生田長江(ちようこう)です。これも翔さんから教わりました」

引いたのは母親への皮肉のためではない。

世の中のこと、みんなそうかも、と思っただけ。

何日か経ち父が帰宅したのを機に、私は書斎の扉を開けた。

どんなに遅く帰ってきてても書斎で医学書にあたる父。何回か愛人を替えているという下半身の問題を除けば、心底尊敬に値する人だった。

「ずっと手術続いていたの、パパ」

「優布、ママに聞いたぞ。何だかずいぶん大人になって帰って来たらしいな」

「前から大人だったつもりだけど」

「つもりはよかったな、それでいい。ハグするか」

父が椅子から立って両手を広げた。

「ラマンの移り香が気になりそうだから遠慮します」

二人そろって大笑いをした。

「難しいオペでな、術後目が離せなかったので泊まり込んだ。だから今日は病院の臭いだけだと思う」
スーツの袖を大げさに嗅ぐ父が可愛かったので、ハグに応じてやった。

「嬉しいもんだな。娘のおっぱいの揺れを直接に感じられるってのは」

「ばか」

少し、見つめあったままの沈黙があった。

「ところで何だ。話があるんだろ、優布」

こういうところも侮れない。

「わたし、精神科だめかな、率直に言って欲しいんだけど」

「自覚症状があつて通院したいのか？」

真顔で覗き込む「父」がいた。人が悪い。

「まじめに聞いて。いまからじゃ、医学部、遅いかな、というか、わたしの能力じゃ無理かな」

父が手で、傍らのソファーに座れと勧めた。

昔から真剣に応えてくれる時の、サインだった。

「すねかじりさんは発想が自由だ。羨ましい」

「やっぱ駄目か」

「優布には向いてる。君はちいさいときから人見知りしない子だった。どんな仲間の中にでも屈託なく入っていける。というか、好き嫌いが少なく、偏見も持たず人に寄り添える。もちろんパパとママの子だからバカではない。集中力もある。好奇心が強くて、調べ物が得意。留守中書斎に入りこんで医療に関する本を盗み読みしていたことも知っているしね」

父の顔をジッと見入った。翔の母親も息子の考えていることが解かると言っていた。親の目の鋭さ、その中に宿る愛情の深さ。そんなことを想った。

「絵はダメだったな」

「ひどい」と大げさに首を振ってやった。

「まあ怒るな。食っていける程じゃないという意味でだ。花嫁修業程度と踏んで美大も承知したが、君のことだ、いつか目覚めるときがくるんじゃないかと、ま、確率としては小さかったが、期待はしていた」

知らなかった。父がここまで私を掴んでいたとは。

「じゃあ、いいのね」

「待て。単なる思い付きや現実からのエスケープじゃない証拠として、この一年間に君に何があったのか、精神史のようなものを聞かせてほしい。君をここまで成長させたものは何だったのか。僕が納

得したら、この先何年かかろうとも全力で援けてあげる」

「ありがとう、パパ、全部話すと時間かかるけどいいの」

尊厳死のことだけは言うまいと心に決めた。死亡診断書も出たという。あくまでも病死だ。それにしても究極の母子愛は何と残酷なものか。この「事件」が客観的に理解できるようにならう。そう思った。

私の決心は固い。

「年頃の娘と一夜を明かせるなんて、これ以上の父親の幸せなんか無いんだぞ、優布」
目の前では父が満面の笑みを湛(ただ)えていた。

(完)

※注

【グスタフ・クリムト】一八六二年生まれのオーストリアの画家。装飾性に富む官能美溢れる作風。代表作『接吻』。マルコピッチ主演の映画『クリムト』は、絢爛豪華な彼の世界を描いている。

【入江泰吉（たいきち）】一九〇五年生まれの写真家。題材は主に大和路。写真の絵画への追従を嫌った。各種受賞歴は驚くばかり。

【ボードレール】一八一八年のフランス生まれ。人間の孤独と苦悩を謳いあげた詩集『悪の華』は有名。この憂愁の詩人は「死」を渴望していたかにみえる。

小説の中で引用した詩。

※①『旅』「ボードレール詩集」（みすず書房）

一四四〜一四五頁

※②『旅への誘い』同一七七頁

※③『自分を罰する者』同八四頁

【ロングフェロー】一八〇七年アメリカ生まれの詩人。健全な人生観に立つ作品が愛されたが、妻ファニーの早死が彼を変えてしまう。

【生田長江（ちようこう）】一八八二鳥取県生まれ。小説家・評論家。翻訳「ニイチエ全集」などがある。